A-5

滋賀県湖北方言の-tar-u 形式の有生性とアスペクト

脇坂美和子
mauswara57@gmail.com

要旨

滋賀県湖北方言（以下湖北方言）には、共通語のテ形＋アル（以下 -te-ar-u）に相当するアスペクト形式の -tar-u が存在する。この形式は
(1)主題または主体との間に存在動詞の ar-u に準じる選択制限を持ち、無生物と共起する
(2)状態動詞や状態を表す動詞に後続して対象の性質や属性を表す
(3)運動動詞に後続して結果相や進行相を標示する。自動詞にも他動詞にも、限界動詞、非限界動詞のいずれにも後続する
などの性質を持っている。

本発表ではこの-tar-u についての文法的な記述を行い、この形式が湖北方言のアスペクト体系において重要な働きを担っており、歴史的には金水（2006）などが提示するアスペクト形式の発達の過程を、方言データによって裏付けるものであることを示す。

また、この有生性の選択制限は、この方言話者の共通語の使用に干渉し、-te-ar-u に転移していることが観察される。このような現象は、話者には意識されにくいものであり、方言話者の共通語形成の過程を観察する上で重要なデータとなり得ることを示す。

キーワード　滋賀県湖北方言　有生性　アスペクト　転移

１．はじめに

滋賀県湖北方言は、滋賀県北部で話されている方言の総称である。京阪方言と、北陸、中部地方の方言が接触するこの地域では、方言アクセントが混在していること（生田 1951, 井之口 1952 ほか）や特徴的な待遇表現（筧 1962 ほか）の存在などが知られているが、総合的な文法記述は進んでいない。

地図 1　滋賀県北部

本発表では、この方言の文法記述に資することを目的として、アスペクト形式の -tar-u の記述と分析を行う。

2 節では、-tar-u の用法を記述し、-tar-u を含む湖北方言のアスペクト形式には有生性に関わる選択制限が見られること、先行する動詞に関わる制限については、名詞句の有生性の制限に伴って生じるものを除いて、ほとんど見られないことをデータに基づいて示す。その上で、-tar-u は語彙資源である存在動詞の ar-u の性質を継承し、この方言のアスペクト形式において重要な役割を果たすとともに、通時的には京阪方言などの文法化が進行する以前の性質を残しており、金水（2006）などが提示するアスペクト形式の発達の過程に裏付けを与えるものであることを論じる。

3 節では、湖北方言の話者が、この形式に対応する共通語の -te-ar-u 形式にも有生性の選択制限を適用する傾向が観察されることを報告し、方言から共通語への文法範疇の転

移について考察を行う。

4 節で全体のまとめと今後の課題を述べる。

本発表は音素表記とし、促音、撥音、長音はそれぞれ Q, N, R で表記する。データを採取した談話資料には、被調査者の符号、生年、性別を付記しエリシテーションによる場合や同方言の母語話者である発表者の作例についてはその旨を追記した。

2. 湖北方言の -tar-u 形式の性質

湖北方言の **-tar-** は存在動詞の ar-を語彙資源とし、動詞に後続してアスペクトなどを表す接尾辞で、/ta/は通常は短母音で現れる。共通語の **-te-ar-u** や、京阪方言の「たーる」(金水 2006)、「タール、ダール、タル、ダル」(中井 2008) (以下、引用を除いて **-taRr-u**) に対応する形式である。

共通語の **-te-ar-u** 形式は、限られた他動詞にのみ後続し機能も限定的である。益岡・田窪 (1992) は「動作の結果としての対象の状態を表す。対象はガ格で表され、関係する動詞は、(中略) 対象の状態の変化を表現する他動詞である。(p.112)」と述べている。

一方、京阪方言の **-taRr-u** については、無生物主語の結果状態を表すのに「-てる」「-たーる」両形式が選択可能である (金水 2006 : 279-80) とされ、「次第に共通語と同じ体系に近づいていくもの(同書 : 281)」という予測が為されている。

以下の小節では、このような共通語や中央部の京阪方言の対応形式とは異なるふるまいを見せる湖北方言の **-tar-u** について、必要に応じてこれらと対照しながら記述を行う。

2.1 -tar-u の共起制限

-tar-u は、(1) のように主題または主体が無生物である時、動詞に後続して結果相や進行相を表すことができる。しかし主体が (2) のように有生物になると、アスペクト接辞の選択には有生性のほかに人称や待遇関係などの選択制限が加わるため、この文脈では結果相には **-tor-** が選ばれる。(3)のように、馬などの有生物が主体の場合に、アスペクト接辞として**-tar-**を取ることはできない。

(1) kisya=ga ki-**tar-u**=wa
汽車 =主格 来る-無生.結果相-非過去=断定
汽車が来ている

(2) uma=ga ki-**tor-u**=wa
馬＝主格 来る-有生.3 人称.下方待遇.結果相-非過去＝断定
馬が来ている

(3) *uma=ga ki-**tar-u**=wa
馬＝主格 来る-無生.結果相-非過去＝断定
*馬が来ている

(1)-(3) (SS-1933 男性 エリシテーション)

本発表に使用した 3 件の談話資料では、総計 2 時間 23 分の自然談話に現れた、共通語の **-te-ar-u**、**-te-(i)r-u** に相当するアスペクト形式 116 件のうち、41 件に **-tar-u** 形式が現れ、その全てが無生物の主題または主体と共起している。これは、この有生性について

の選択制限を裏付けるものである。例外的な現象については 2.2 で後述する。

2.2 性質や属性を表す-tar-u

共通語では、**-te-(i)r-u** 形式で性質や属性を表すことがある。たとえば益岡・田窪(1992) は「テイル形の表現は、時間的な限定が希薄になると、対象の属性（性質や特徴）を表す（p.116)」としている。

湖北方言でも、同様に **-te-(i)r-u** に対応する形式で性質や属性を表すことができるが、ここでも有生性の選択制限が働き、 無生物に関してはこの機能は**-tar-u** が担っている。この方言では、**tar-u** は、共通語の **-te-(i)r-u** は後続しない状態動詞の一部などにも後続して、対象の属性や性質が現存していることを明示的に表す。この性質は、有生物と共起する **-te-(i)r-u** 等についても同様である。(4)-(6)の例は、いずれも対象そのものの属性や内部構成、性質について述べており、なんらかの変化結果に言及しているのではない。

(4) somosomo namae=ga tig-o-**tar-u**
そもそも　名前 =主格　違う-挿入母音-無生.状態-非過去
そもそも名前が違っている（違う）
(WD-1936 男性)

(5) sakana=no naka=wa　doo　naQ-**taN**-nya=to
魚＝属格　中＝主題　どう　なる-無生.状態-名詞化.繋辞＝引用
魚の中（構造）はどうなっているんだと
(YO-1932 男性)

(6) hono kankaku=ga　haQkiri+si-**tar-u**　sakai
その　感覚=主格　はっきり＋する-無生.状態-非過去　理由
その感覚がはっきりしているから
(US-1921 男性)

この方言のアスペクト形式には、語彙資源である存在動詞の意味が継承され、文法化する以前の性質が残存していることは、このようにアスペクト的な意味が希薄な、あるいは存在しない場面においても、有生性の選択制限が存在することによっても示されている。

なお「似る」「見える」などの状態動詞については、客観的な事実を述べる場合であれば、(7)のように有生物を主題に取ることが可能な場合がある。

(7) o＋too+san=ni ni-**tar-u**=de
丁寧＋父+さん＝与格 似る-無生.状態-非過去=理由
（この子は）お父さんに似ているので　作例

ただし、主題が「似ていること」「見えること」のような客観的な事実ではなく、対象である有生物の性質である場合は、その対象の人称、待遇関係に応じた接尾辞が現れる。有生物と共起する接辞は、後述するように人称や待遇関係等についても名詞句との間にさらに複雑な選択制限があるため、逆に無生物の対象に有生物と共起する接辞が現れることは、擬人化される場合を除いてほぼ見られない。

2.3 結果相、進行相を表す -tar-u

湖北方言のアスペクト体系は、工藤（1995）以降の一連の研究による分類に従えば、結果相と進行相の形式を区別しない、共通語と同様に二項対立の体系である。湖北方言では、主題または主体が無生物である限りは、(8) に見るような限界動詞の結果相、(9)のような限界動詞の進行相（金水 1995 のいう強進行相)、(10)のような非限界動詞の結果相（同書のいう弱進行相)、(11)のような非限界動詞の進行相のいずれにおいてもアスペクト標示は **-tar-u** が担っている。

(8) age=ga　kizami+koNbu=to tai-**taN**=nya
油揚＝主格　刻み＋昆布＝共同格　炊く-無生.結果相-名詞化.繋辞
油揚が刻み昆布と炊き合わせてあるんだ

(US-1921 男性)

(9) haa=ga oQ-**tar**-u
葉＝主格　落ちる-無生.進行相-非過去
（目の前で）葉が落ちている

作例

(10) kuruma=ga ugoi-**taQ**-ta
車＝主格　動く-無生.結果相-過去
車が（置いておいた場所ではない位置に）動いていた　（動かされていた）

(WD-1936 男性　エリシテーション)

(11) kuruma=ga ugoi-**taQ**-ta
車＝主格　動く-無生.進行相-過去
車が（ゆっくりと）動いていた

(WD-1936 男性　エリシテーション)

主題または主体が有生物である場合にも、結果相と進行相を区別しない二項対立の体系は同様である。しかし、有生物については人称、待遇関係と名詞句との選択制限（脇坂 2016）や、証拠性、「兆候に基づく直後の運動の完成の推定といったモーダルな意味(工藤 2014 : 364)」のような派生的な意味の選択制限が、有生性の選択制限とは別にかかってくるため、無生物よりも複雑な体系をなし、別に記述を行う必要があるので、詳細については機会を改めたい。

2.4 自動詞にも他動詞に後続する -tar-u

動詞に自他の対応がある時、共通語では「蓋が開いている」「私が蓋を開けている」のように、自動詞と、他動詞の動作主体の動作を表すには無標の **-te-(i)r-u** 形式を用い「蓋が開けてある」のように、他動詞の対象の結果を表す場合にのみ有標の **-te-ar-u** 形式が使用される。

これに対して、湖北方言では、(12), (13)の例に見るように、他動詞であれ自動詞であれ、主題が無生物の名詞句である場合には **-tar-u** が無標の形式として使用される。有生の名詞句が他動詞の動作主体として明示されるか、または文脈から明らかで、動作主に言

及する場合にのみ、(14) のように動作主体の有生性と人称、待遇に対応したアスペクト接辞が用いられる。(12) はアスペクト接辞が、この方言の話者においては優勢の短母音ではなく劣勢の長母音で現れている例である。

(12) tyoito　　kosara=ni tui-**taar-u**
　ちょいと　小皿＝場所 付く-無生.結果相-非過去
　(白和えが) ちょいと小皿に付いている

(UY-1922 女性)

(13) tyoito　kosara=ni tuke-**tar-u**
　ちょいと　小皿＝場所 付く-無生.結果相-非過去
　(白和えが) ちょいと小皿に付けてある

(作例)

(14) tyoito　kosara=ni tuke-**ter-u**
　ちょいと　小皿＝場所 付ける-有生.1.2 人称.結果相-非過去
　(私が白和えを) ちょいと小皿に付けている

(作例)

これを自他対応の観点から見ると、(12)、(13) のような語彙的な自他対応には **-tar-** は関与しないが、(13) と (14) を見ると、(14) の他動詞の項が (13) では一つ減っている。ここでは、金水 (2006) が近世中期以降の近松作品の「–てある」の例について指摘するものと同様に「受動文のような格体制の変換が生じている (金水 2006 : 275)」。すなわち、(13) は、他動詞の目的語が主語に昇格すること、他動詞文の主語に対応する要素を表せないことから、いわゆる逆使役構文 (木部編 2019 : 46) に該当するといえる。

2.5 湖北方言におけるアスペクト接辞としての-tar-の位置付け

これまで見てきたように、湖北方言の**-tar-u** 形式は、状態動詞を含む自動詞、他動詞、限界動詞、非限界動詞のいずれにも後続し、状態や属性、進行相、結果相を表す。これは、語彙資源とする存在動詞の ar-u の性質を引き継いでおり、名詞句との間に強い選択制限を持つと同時に、先行する動詞についてはタイプを選ばず、名詞句の性質を標示することが優先される。先行することができる動詞の範囲は、共通語や京阪方言で、**-te-ar-u, taRr-u** 形式がカバーする範囲よりもはるかに広い。

このことは、工藤 (1995) 以降の一連の研究において「準アスペクト」ないし「二次的なアスペクト形式」と位置付けられてきた **-te-ar-u** 形式に対応する形式が、少なくとも湖北方言に関する限り、これを二次的な位置付けに留めることはできないことを意味している。たとえば工藤 (2014) は「標準語の『してある』形式は、『死んである』『壊れてある』『鳴ってある』とは言えず、すべての動詞を捉えていないことから、文法化の進んだ中心的なアスペクト形式とは認めがたい (p.486)」としているが、**-te-ar-u** に対応する湖北方言の **-tar-u** 形式は、これらの全ての動詞に後続する。もちろん、無生物が主体であるから通常は「死ぬ」には後続しないのであるが、現代語では共通語でもメタファー的に「システムが死んでいる」「電波が死んでいる」などの言い方が日常的に為されており、湖北方言ではこれを siN-**dar-u** ということができる。

とはいえ、この方言において -tar-u が「中心的なアスペクト」と言えるわけではないことは、-tar-u が有生の主題とは共起できないことからも明らかである。有生物に後続するアスペクト接辞については、湖北方言にはそもそも語彙資源である存在動詞に、人称、待遇に関わる選択制限がある(脇坂 2016)。アスペクト形式もこれに準じる選択制限を持っていることから、先に述べたように、二項対立に還元できる無生物よりも複雑で、証拠性やモーダルな意味なども合わせて、別途記述する必要がある。詳細については機会を改めることとしたいが、主体が有生なのか無生なのかによってアスペクト形式の性質が大きく異なるために、現時点で共時的な記述を行う限りにおいては、どの形式が「中心的」であるかという問題を提起することは困難であるといえるだろう。

3. -tar-u 形式から -te-ar-u 形式への有生性の選択制限の転移

湖北方言の話者は、方言形の-tar-u にかかる有生性の選択制限を共通語の-te-ar-u に転用し、次のような、共通語では、通常許容されない、あるいはされにくい形式を共通語として使う傾向がある。「気がつきにくい方言」(沖 1999)「気付かない方言」(木部編 2019)などと呼ばれる現象の一形態と考えられる。以下の例は、方言形式ではなく方言話者が共通語と考えている形式なので、かな表記とする。

(15)　ごみが出てあります。
(16)　財布が落としてあった。

(15)-(16) 作例

(15) はごみが勝手に出たのではなく、出してある状態を指して出てあると言っている。
(16) でも、誰かが財布を意図的に落としたというニュアンスではなく、単に財布が落ちていた状況の描写である。このような現象の特徴として、
a) 対応する方言形式そのものは転移しない。話者には -tar-u に対応する共通語としての -te-ar-u の使用という認識があり、レジスターとしての共通語を話す場合にのみ現れる
b) 個々の用例ではなく「有生性という文法範疇による選択制限が、アスペクト形式に関与する」という現象全体が方言話者の共通語に転移する
c) 個々の用例を見るだけでは観察できず、話者にとって気づきにくいため、意図的に変える機会が少なく変化しにくい
d) 共通語のインプットの頻度が高い使用例（雨が降っている、など）については転移しないものもある。個人差、年代差が大きいと見られる
などが挙げられる。これらの例は、方言が一方的に共通語に影響されるだけではなく、「共通語」の形成に方言の性質が影響を与えることを示すものであり、方言話者の共通語の形成の過程を観察する上で重要な視点を提供する事例であると考えられる。

4.まとめと今後の課題

本発表では、共通語の -te-ar-u 形式にあたる湖北方言の -tar-u 形式について概観した。-tar-u は存在動詞の ar-u を語彙資源とするアスペクト接辞で、この ar-u の性質を継承して、主題または主体の名詞句との間に強い有生性の選択制限をもち、無生物と共起する。その一方で先行する動詞のタイプには、名詞句の有生性の制約から生じるものを除い

ては、ほとんど制限がなく、共通語や現代の京阪方言と比べて、極めて広い範囲をカバーし、共通語では -te-(i)r-u 形式が担う機能や、共通語には見られない性質も担っている。これは金水（2006）などが提示する存在動詞からアスペクト形式の発達過程について、古い形式を残す方言としてデータを提供し、これを支持するものである。またこの形式に見られる選択制限は、この方言話者の共通語の使用に干渉し、影響を与えている。

本発表では、データに基づいてこれらの言語事実を示したが、多くの点で課題が残っている。第一にこの方言の文法記述、特に存在動詞とアスペクト接辞については、本発表でとりあげた無生物と共起する-tar-u の記述はごく一部に過ぎない。総合的な文法記述を進めた上で、この方言の体系の中に位置付ける必要がある。また、2 節で取り上げた逆使役構文については、佐々木（2007）など一連の方言研究において提示される類型論的な枠組みに照らして、他の方言との関連も参照しながらさらに記述を進めたい。

本発表で取り上げた接辞の有生性に関わる選択制限について、この方言に古い形式が保存されているとするならば、アスペクト接辞の人称制限や待遇関係の標示など、他の領域についてもなんらかの言語事実を継承している可能性がある。通時的な研究に資することも視野に入れてさらに分析と記述を進めたい。

参考文献

生田早苗（1951）「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」寺川喜四男・金田一春彦・稲垣正幸編(1951)『國語アクセント論叢』255-346. 東京：法政大学出版局.

井之口有一（1952)『滋賀縣言語の調査と對策: 方言調査編』彦根 : 井之口有一（私家版).

沖裕子（1999)「気がつきにくい方言（地域方言と社会方言）-- (地域方言とその周辺)」『日本語学』18 (13) : 156-165.

筧大城（1962)「滋賀県方言」楳垣実(編)『近畿方言の総合的研究 』159-217. 東京 : 三省堂.

木部暢子編（2019)『明解方言学辞典』東京：三省堂

金水敏（1995)「いわゆる「進行態」について」築島裕博士古稀記念会編『築島裕博士古稀記念国語学論集』169-197. 東京：汲古書院

金水敏（2006)『日本語存在表現の歴史』東京：ひつじ書房

工藤真由美（1995)『アスペクト・テンス体型とテクスト－現代日本語の時間の表現－』東京：ひつじ書房

工藤真由美（2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』東京：ひつじ書房

佐々木冠（2007)「北海道方言における形態的逆使役の成立条件」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編『他動性の通言語的研究』259-270. 東京 : くろしお出版

中井幸比古(2008)「京都方言の形態・文法・音韻(1)―会話録音を資料として(1)」『方言・音声研究』1 : 9-200.

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法・改訂版』東京：くろしお出版

脇坂美和子（2016)「滋賀県湖北方言の存在動詞と名詞句階層・アスペクト・待遇範疇」日本言語学会第 153 回大会口頭発表. 福岡大学. 2016 年 12 月 3 日.